

様に送られて、再び婚家へ送らるゝのだらうと思ふと、他人事とは思はれず、懶げな姿が殊更哀れに、私が娘を贖めると、爺様も意味ありげに私を胸のである。

「……自分の恥を話すが、私なども憐れう見えて之で随分若い時代には我儘者でしたから、両親が念入れに之れならばと定めて呉れた家にもよう居らずそれかと云つて、自身と卒先んで嫁いだ家てさへ、一緒に住居んで見ると、左程嬉しくも楽しくもなく、舅姑の氣嫌も取らねばならず、小姑の心も慰めねばならず、夫れ等の面倒がはし無くも、縁の亂れの緒となつて、初な心の、遂には其所にも居堪らず、暇を取つて戻ると云ふ始末、彼方此方してゐる間に、年は段々老けて来る、嫫致は落ちる、嫫致が落ちれば四邊からの結婚申込が疎くなる、遂には勢此方から申込むと云ふ様な理由で、揚句の果が這麼境遇の家へ嫁入つて、夫れて満足にやならない様になつて了つたんですが、實んに女は娘の間の辛抱が大切ですよ、私などでも最う少し、那の時分に忍耐があつたらば

出してから未だ半時間とは立たないのてある。西側ずらりと舐め盡して猶、足れりとせぬ烈火は、向ふ側に一際高き老舗の屋根に飛火して、其、店に、庫に、堆き幾千種の薬が焼ける怪しの臭氣。亂打の半鐘もの凄く、彼方此方の叫喚！悲鳴！風は益々猛り狂へば、焔は彌々勢を得て、此所を必死のい組が目覺しき消防も、今は、鍋から溢るゝ水の爐の火に落つるのに價せぬ。

「ポンプ！ポンプ！酒に火がついたッ」氣魂しき叫びは何處からともなく起つた。酒屋を襲ふた火は、早くも幾桶の酒を焔と化して、其焔を八方に、一面真紅の大手を揚げさせたのである。此火を裏手より浴びた一續の長屋は、見る／＼火塊に包まれてしまつた。

「あつ母さん!!」突然血ばしりたる一聲は朦々たる天地を劈くよと見る間に、道に横れる焼板を飛び越え、火花の間をくゞつて、渦巻く黒煙の間に躍り込む者がある。

「あつ母さん!!!」狂し氣の又一聲。屋根を舐めたる火は今、軒に迫つた。「あつ母さん!!!」

女子文壇 第三卷第貳號 短篇 小説

這様貧困はせなかつたらうにと、折々は愚痴らしい事を言ふのでムいですが、ホ、ホ、ホ、もう遅いんですか」と言つて、婦人は淋しく微笑んだ。

老翁は無言の儘頷ぐ、娘も今は何か考へてゐる。私は故郷の両親から、引いて自らの前途を思ひ浮べて今迄の淺はかな考へが、此の婦人の話しの前前に、何とは言へぬ恥かしさを覺えたのである。磨いだ様な湖面を、櫓拍子軽く、船は無言の感慨を乗せて、滞りなく進むのである。



岩代須賀川町 服部水仙子

實に麗の手、鬼女の舌。空を焼かんず焔は、宵からの北風に煽られ／＼と、家を攀ぢ、地に這ひ、逞し勢に火の手を延せば、被竹の響頻りなるに續いて起る一大爆發の音。見る間に一棟は落ちてしまつた。屋並揃ふた中頃の家の、裏手から揚つた怪しの煙を見

バラ／＼と頰れ落ちた屋根の響に、齒かに細き又一聲。全焼三十九戸、半焼十五戸の調査を終へたる頃は、織るが如き大路の提灯、一つ消え、二つ減じ、やう／＼に見舞う人足稀に、斗樽を下げて走る小僧、焚飯擔つて急ぐ若者の、ねぢり鉢巻ほの白く、早鐘の未だ耳底に残る午前二時!

昨夜の猛風は何處に潜んだらう?あまりに著しい寂寞ではあるまいか。黒裸にされた立木の處々。彼方に燦る黒き煙、此方に崩る、焼死、見渡す限り一面の焼野は、道か、屋敷か狼藉たる木材の黒々と。

佩劍の音がチャーン々々黒影頻りに動くは物調ぶる警官である。一人は手帖に何やら認むれば、三人は高く馬乗提灯を差上げて居る。其つかれた如き灯影に現し出された此場の光景を見よ。戸板の上に横れる黒きものは何!猛火のうちに煙を飲んで、母を呼び、母を尋ねて狂氣の如く、つひに其狂氣の境より覺ゆるを得ぬ宮川真一の母と云ふことは、つひに今し方分つたところである。衣は焼かれ、肉は爛れて、目も當てられぬ母の死骸を、彼は何と見るであらうか、と警官は皆一

様に眞一の顔を見成つた。

「何だこれあ、犬か？」「ハ……」
一聲高く笑つて、さて昨夜の負傷に、血の滴る右腕を
訝し気に眺めて居る。四人が四人、皆息を飲んだ。

「火事だ！」「何處だつ」

血走りたる眸に邊見廻して、やがて矢庭に駆け出した
「あつ母さん！」「あつ母さん！！あつ母さん！！」
熱灰の間を、續け様に呼はりつゝ、駆け廻つて居る。

あゝ、應との答はいつ彼の耳に響いてあろう？
今こそ此處職工でこそあれ、私だつて男一匹、今に必
ず宮川の家を再興して見せる。と常に半身不隨の母を
慰めて居た眞一は、かくて此まゝ、憐れな者よとのみ
で終つてしまふてあろうか。

星の数々、雲に入つて、白みかゝつた空に、光弱き夜
明の明星一つ。寂しき、翼しき曉は來た。

別に感情を歌つたものではないが、火事場の光景、暗るが如く描かれ、
惨憺たる親と子の境界を描いて、人をして其場の有様を想像させる、
之れ作者が獨得の筆の方で、文章の技は益々熟して來るやうだ。
(選者評)

映れる花

愛媛縣温泉郡
北吉井村

水口 菊子

と鼻を打つ。

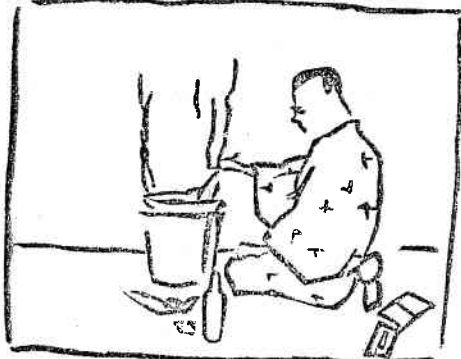
「どう、く、く、手綱を押へたら胸の間だ、新造
船へおぬしが乗つたら、水際三尺すつこんだわ」
高く笑つて杭の先き、諸手でぐつと突張つて棹はざぶりと
と鏡を破つた、ゆつたりと出る胸の間に光は駒を押
へて立つ。

「喃、お光坊、おぬしもまあ長い間苦勞
したとが、今年から運が向いて、めつき
り様子が変わつたやな」
老爺は、するりと杖を、お光は入日に瞳
つた眼を、駒の背越に老爺へ向けた。

「去年の元日は眞に心細くつて、女一人
の正月でのう誰一人訪ねてくれる人はな
し、餅一つも焼かなかつたが、今年や父
さんも東京から歸つて來る兄さんも病院
出られて賑やかだつて、夜なんざ、それ
はそれは、根太が抜けるかと思ふ位さ」

「さうだらう！吉の野郎は能くおぬしの家へ行くさう
だが、食ひ酔つて世話あ焼すべえ、何しろ目出度い正
月だ、お光坊の正月が來たやうなものだぞや」
お光は莞爾片頬に笑つて、

自 吹 (外 設) 中 大 立 目 向 羊



「兄さんの病氣も去年の春はもう危いと云ふ事だつた
し、父さんの要事もどうなる事か譯らないし、眞に心
細かつたのが急に安心した故だか、何だか氣拔えした
やうだ」
「えい、わ」

小 説
重信の流れに今は日も入りがての、晒映す雲を背にし
て、鹿毛の若駒に梅水仙の筵包み、父へ土産の心であ
ろう、少なき梅さへ添へてあり、やさしう細の手綱を
とつて、小棹は帯に兩端を、紅き蹴出しの脛を包むて
白き素足に藁草履、痛々しうも小砂利づたひ、少女は
小股に刻みながら、渡場近く來るのであつた。
暮の渡りに人もあらず、流るゝ水に臨んで、草葺の小
屋、風にも倒れず、戸口に小さく雌松の枝、春は此處
にも來たことか、と乙女は暫時駒をとめた。
「彌平さん、氣の毒だけんど、新村のお光だに、船を
出してくれさつせえな」
可愛き口から漏れた一言、聞えてか、彌平爺小屋から
のそく、咬へ煙管、皺の額に鉢巻して、乙女を見ると
腰を伸した。

「やア、お光坊か、今日は何處まで行つたやな、元日
からさう持いては、ちつつけ土藏が立たうかへ、鹿毛
も能く働くの、今に運が向いて來るわ！」
小屋からするり水馴棹、押取つてとんと一つ、砂に土
突き威勢がいゝ。
「さあ來なせえ、新造で渡してやるべえ」
元日に下せとばかり、新らしき船一隻、木の香はふん

と棹を左へ返して老爺は呢と乙女を見
た。

「えい、わ、氣抜けえする程嬉しい正月だ
らさ、これでおぬしが嫁さやあ、云ふ事
なしの坊主頭だ」

「わし等のやうなもの貰手はねえだか
ら、それだけは安心さねえ」
「何が安心だか、吉と云ふ立派な男が、
疾からおぬしを望むて居るわさ、溝の口
にまた一夫婦殖るつてな彼方に噂がある
だよ」

雲に消えたか晒の色、乙女は頬に頬と漲
らし髪のはつれを風にかけて、渡る彼方の岸近く、
迎いに立つた吉の姿

「えい、見るが、いゝ、婿様あお迎にごさらつせえた」
駒嬉しいか嘶き高く、荷鞍の梅に春は満ちて流るゝ水